

調査報告

トロス司教座聖堂出土の裝飾石材について

—二〇一三年度および二〇一四年度の発掘から

奈良澤 由美

キーワード

彫刻 リキア 古代末期 中期ビザンティン

抽出石材の概要

二〇一三年夏の発掘では二三四例、二〇一四年夏の発掘では三九例の石材遺物が抽出され、ナンバリング、測量、写真撮影、簡易記述が実施された。^①抽出遺物番号は、二〇一三年出土のものはn.o. 170からn.o. 404まで、二〇一四年出土のものはn.o. 405からn.o. 441までである。また、二〇一二年以前のトルコ隊による準備発掘に際して抽出された四七例の石材について、ナンバリングが実施された。^②

二〇一三年夏に日本隊から抽出された遺物のうち、全く

裝飾を持たない角材、角材断片、あるいはコーニスや柱台などを構成していたと見做されるくり型裝飾を持つ建築材断片以外は、柱頭や柱身など、柱に関係する石材断片が多数を占めている。^③壁の裝飾材と考えられる厚さ二・五〜三cmの薄い石板断片^④、あるいは床の敷石と考えられる六角形の石板の完形^⑤、また、聖堂内の典礼設備の構成要素であったと見做される、頂部裝飾を持つ太さ一四〜一五cmほどの四角形ないし多角形の小柱の断片^⑥(図1、2)などが、柱以外に機能が比較的明確に断定できる例として指摘される。

柱頭以外の浮彫裝飾をもつ石材断片は三〇例ほどであ

り、そのうち、石灰岩製の透かし彫り裝飾板の断片一七例が特にまとまった裝飾彫刻グループとして存在している（後述）。

二〇一二年以前のトルコ隊の準備発掘から抽出された石材は、すべて裝飾断片であり、二〇一二年の本発掘の際に出土した中期ビザンティンのアーキトレーヴ石材と共通する裝飾モチーフを有する断片が、少なくとも一三例存在する。それらのアーキトレーヴ石材の全ては比較的小さな断片であり、連続アーチ文のうちの一アーチ、あるいはアーチをつなぐ柱裝飾が、部分的にそれぞれ残されているのである（図3、4）。一方、準備発掘に抽出された石材において、やはり石灰岩製の透かし彫り裝飾板の断片が相当数出土している。

二〇一四年は出土した石材自体が少なく、抽出された遺物の大部分は大理石ないし良質の石灰岩の床材であった。これらは至聖所の東部分の床直上から出土している。厚さについても裏面の仕上げの状態についても多様であり、形が不規則な石板断片も多く、様々な大理石石板の断片が床材として再利用されていたことを示している。抽出された石材のうち、少なくとも二九例が、床材として使われていたと見做される。厚さ二〜三・五cmのものが二一例、四〜六cmが四例、八〜九cmが四例であり、正方形^⑩、長方形^⑪、ない

し三角形の板材^⑫がいくつか指摘できる以外は、台形ないし不規則な形状を示す。裏面は平滑に仕上げられている場合と、荒削りのままに残されている場合がある。裏面には漆喰がしばしば残されている。

透かし裝飾板断片

地域産石灰岩で作られた透かし裝飾板の断片が、二〇一二年以前の準備発掘において二〇例抽出されており、さらに二〇一三年の発掘において一七例が抽出された。二〇一三年に抽出された作例は比較的小さな断片であり、厚さは七〜九cmである。

これらの断片が属していた複数の裝飾板は、それぞれの全く同じ模様・構成ではなかったが、裝飾様式、モチーフは共通しており、同じ工房の制作であり、同時期に聖堂内に置かれていたと見做される。至聖所の囲いのような典礼設備の一部であったと考えられ、石板の下部はホゾが彫られ、床にあつらえられた溝にはめ込まれていた（図5）。

石板は、透かし彫りの施された中央部分と、透かし彫りを囲む枠部分から成る。透かし彫りの部分は、植物的なツルの帯の曲線模様（図6、7、9、11）、あるいは格子のような直線の帯の幾何学模様（図8）に斜り貫かれている。

石板の表と裏の面には、枠と削り貫かれた帯の表面上に、しばしば簡略な線刻によつて浮彫裝飾が施されている。基本的に、片面（＝裏面）の裝飾はより簡略的であり、たとえば、くり貫かれた帯の表面は中央の刻線により二重帯になつており、裏面には刻線はなく一重になつている場合が多くなる例で認められる。植物模様の浮彫裝飾もしばしば裏面では省略されている。

n. o. TB003、n. o. TB026 (図12) の断片が構成していた透かし彫り裝飾板は、太い枠にかこまれており、その枠の内側に様式化されたパルメット模様が彫られていた。様式化され、しばしば簡略な線刻によつて表されたパルメットの葉の模様は、出土した多くの断片に認めることが出来る。

透かし彫り裝飾は五く六世紀のコンスタンティノポリスの工房で制作された、大理石を用いた多くの作例が知られている。アナトリアは、コンスタンティノポリスの工房の影響を直接的に受けているが、概して地方産の石灰岩を用いた、地方工房制作の類例が発見されている。

たとえば、ミュラの聖ニコラウス教会からは、複数の透かし彫り裝飾石板の断片が出土している。線刻の中央線により二重化された曲線や直線の帯の透かし彫りは、明らか

にトロスの作例と共通しており、また、トロスの n. o. TB003、n. o. TB026 の枠上のパルメット模様は、ミュラの一断片の意匠とほぼ共通する。同じくリキア地方のアペルライからも、類似する様相の複数の断片が出土している。トロスの n. o. TB007 (図10) および n. o. TB013 の断片に見られるような極度に様式化された長い葉のモチーフは、アペルライやアンドリアケ出土の石材断片の裝飾と酷似しているが、S. Alpaslan によれば、こうした葉のモチーフはリキアの沿岸地域の工房に特有のモチーフであり、コンスタンティノポリスには存在していない。これらのリキアの地域産石灰岩を使用した明らかに地域工房作の裝飾石板は、先行研究により六世紀と年代推定されている。

トロスの聖堂にて出土した透かし彫り裝飾石板断片は、よつて、六世紀のリキアの地方工房で制作された裝飾石板であり、カンケツリのような典礼設備を構成していたと考えられる。使われている石灰岩はもろく、さらに透かし彫りであることから通常以上に壊れやすかつたはずであり、比較的早くに劣化し放棄されたと推測される。

組み紐模様とロゼッタ文の裝飾石板（no. 407）

二〇一四年に裝飾面が発見され、ナンバリングされたほぼ完形の白大理石製の長方形板（no. 407）は、聖堂北側廊と身廊をつなぐ東入口の前（身廊内）に、浮彫裝飾面を下にして置かれていた（図13）。幅一〇七cm、高さ九〇・五cm、幅一〇cm。

表面（裝飾面）は、太い枠に囲まれた八二×六五cmの空間が浮彫で裝飾されている。枠の面は平らであり、一〜一四cmの幅を持つ。両短辺上、一長辺より二四〜二六cmの場所に、直径二cmの小さな穴がそれぞれ一つずつ掘られている。

裝飾は、三つの細紐から成る太紐による組み紐模様が全体構図を構成し、四つの円を周辺に配し、中に円を一つ内包するひし形の構図が作られている。この組み紐が作る五つの円の中に、それぞれ円形のモチーフが表されているが、それらのモチーフは全て異なった形態を有している。中央の大きな円の中には、先端のとがった一六の花弁からなるロゼッタ文が彫られている。周辺の四つの円の中は、二つの細紐からなる太紐が作る「ソロモンの結び目」、同様の組み紐による四つの輪が重なった花文、方形の花芯と半円形の四つの花弁から成る花文、さらに三つの二つの細紐か

らなる太紐が作る「ソロモンの結び目」によりそれぞれ飾られている。

裏面は全く裝飾がなく平らであり、一長辺から一八〜二一cmほどの距離に、長辺とほぼ平行に直径一・五〜二cmの小さな穴が三つ掘られている。石板の四側面も平らであり、ホゾ穴や溝は存在しない。

組み紐模様により作られるひし形空間と花文の裝飾構成は、中期ビザンティン時代にアナトリアおよびギリシアの各地に広く使われた裝飾構成であり、アナトリア地方各地でも数多くの比較例を見つけることができる。たとえば、ヤルヴァチュの博物館に所蔵される裝飾石板²³、キュタヒヤの博物館所蔵のアーキトレーヴ断片²⁴、アフィヨンの博物館のテンプロンの裝飾石板、アクシエヒルおよびエスキエヒルのアンボンの裝飾石板²⁵、ミュラの聖ニコラウス教会の裝飾石板²⁶、アンタルヤ考古博物館所蔵の裝飾石板、シバスの聖堂から出土したテンプロン裝飾など。トロスの作例と特に近いものとして、たとえば、前述のキュタヒヤの断片の裝飾では、中央が大きなロゼッタ文で、周辺の四つの円の中は二つ細紐からなる組み紐模様の「ソロモンの結び目」で飾られている。あるいは、ミュラの聖ニコラウス教会の石板の裝飾は、中央の円からひし形、周辺の四つの小円、

そして外枠へと太紐がつながる様相において、最もトロスの例の装飾に近いだろう。とはいえ、これらのアナトリアの各地に出土する作例は、中期ビザンティンの浮彫装飾において全般的に言えるように、共通した装飾モチーフを用いながらも全く同じ模様は存在していない。

トロスの石板中央のロゼッタ文の、全ての花卉の先端が外に向かい一律に鋭く低くなる表現様式は、マニサの考古博物館のアーキトレーヴ上のロゼッタ文や、アフロディシヤス出土のまぐさ上のロゼッタ文などと共通する。

註

- (1) 二〇一三年については高橋翔（筑波大学）、山本悠貴（筑波大学）、山根友樹（立教大学）により、二〇一四年については青山竜済（立教大学）の協力のもとに、抽出石材の測量、撮影、一覧表の作成が実施された。
- (2) No. TB001 ~ 047. 二〇一二年に写真撮影が実施されてゐる。
- (3) 柱頭ないし柱頭断片が一七例、柱身断片が三六例抽出。
- (4) Nos. 241 ~ 244.
- (5) No. 301.
- (6) Nos. 210, 211, 240, 295, 313, 336.
- (7) 田中映子「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一二）—聖堂装飾（アリーナ・フレスコ）を中心に」『史苑』七三—二〇一三、一—三頁以下、浦野聡「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一三）—考古学・建築上の知見から」『史苑』七四—二〇一四、一—五〇頁以下。
- (8) Nos. TB005, TB006, TB016, TB018, TB021, TB024, TB025, TB029, TB030, TB031, TB032, TB034, TB038.
- (9) Nos. 409 ~ 437.
- (10) Nos. 415 (一六 × 一六 × 二・五 ㊦)。
- (11) Nos. 423, 424.
- (12) Nos. 416, 426.
- (13) Nos. TB001, TB003, TB007, TB008, TB010, TB011, TB012, TB013, TB 014, TB 015, TB 017, TB 019, TB 020, TB 026, TB 035, TB 042, TB 044, TB 045, TB 046, TB 047.
- (14) No. 017 (厚^キ九 ㊦)・no. 200 (厚^キ七・五 ㊦)・no. 201 (厚^キ八 ㊦)・no. 235 (厚^キ九 ㊦)・no. 257 (厚^キ八 ㊦)・no. 270 (厚^キ七 ㊦)・no. 311 (厚^キ八 ㊦)・no. 323 (厚^キ四・

- 五冊)´ no. 342 (厚_レ九冊)´ no. 343 (厚_レ十_・五冊)´ no. 354 (厚_レ十_・五冊)´ no. 360 (厚_レ十_二冊)´ no. 367 (厚_レ八冊)´ no. 377 (厚_レ六_・五冊)´ no. 388 (厚_レ十_・五冊)´ no. 393 (厚_レ十_二冊)´ no. 394 (厚_レ十_二冊)。
 (15) Nos. no. 200, 235, 270, 342, 343, 354, 360, 367, 377, 388, 394, TTB008, TTB010, TTB013, TTB 014, TTB 015, TTB 017, TTB 019, TTB 020, TTB 026, TTB 035, TTB 042, TTB 044, TTB 047 ㄹ_ㄷ。
 (16) S. Alpaslan, « Architectural Sculpture in Constantinople and the Influences of the Capital in Anatolia », *Byzantine Constantinople : Monuments, Topography and Everyday Life, Acts of a Colloquium Held in Istanbul*, 7-10 April 1999, Leiden, 2001, pp. 187ff.
 (17) U. Peschlow, « Materialen zur Kirche des H. Nikolaos in Myra im Mittelalter », *Istanbuler Mitteilungen*, 40, 1990, pp. 216-219, Abb. 2, Taf. 41, 3 ; S. Alpaslan, *op. cit.*, pp. 192-193, fig. 5 ; *Demre-Myra : Demre-Myra. Aziz Nikolaos Kilisesi*, Istanbul, 2014, p. 119.
 (18) *Demre-Myra, op. cit.*, p. 119 ㉔右_レ上_レ真_レの断面。
 (19) S. Alpaslan, *op. cit.*, p. 193, fig. 6.
 (20) O. Feld, « Die Innenausstattung der Nikolauskirche in Myra », *Myra. Eine Lykische Metropole in antiker und byzantinischer Zeit, Istanbuler Forschungen* 30), 1975, Tafel 132-G ; S. Alpaslan, *op. cit.*, fig. 6.
 (21) S. Alpaslan, *op. cit.*, pp. 200-201.
 (22) U. Peschlow, *op. cit.* ; S. Alpaslan, *op. cit.* ; *Demre-Myra, op. cit.*
 (23) A. Grabar, *Sculptures byzantines du Moyen âge : XIe-XIVe siècle*, Paris, 1976, Tav. IVb, e ; VIIIb ; XIIIc ; XXIa-b ; XXXVc ; XXXIXa-b ; LXVIIIc-d.
 (24) A. B. Yalçın, « Le sculpture meiodibizantine di Yalvaç », *BCH Suppl.* 49, 2008, p. 144, fig. 3.
 (25) A. B. Yalçın, *op. cit.*, figs. 18.
 (26) H. Buchwald, « Chancel Barrier Imrehs Decorated with Carved Arcades », *Jahrbuch der österreichischen Byzantinist.* 45, 1995, p. 254-255, fig. 3.
 (27) M. Demert, « Mittelbyzantinische Ambone in Kleinasien », *Istanbuler Mitteilungen*, 45, 1995, p. 144, Tafel. 51, 2-3.
 (28) O. Feld, *op. cit.*, p. 376, Tafel 122C ; S. Alpaslan-Doğan, « La sculpture byzantine en Lycie et à Antalya : sa place dans l'évolution de l'art byzantine », *BCH Suppl.* 49, 2008, pp. 128-129, fig. 3.
 (29) S. Alpaslan-Doğan, *op. cit.*, fig. 14.
 (30) N. Firatlı, « Deux chapiteaux rares à décoration animale trouvés à Istanbul », *Cahiers archéologiques*, 23, 1974 pp. 41-46.
 (31) C. Barsanti, « Scultura anatolica di epoca meiodibizantina », *Milioni I. Studi e ricerche d'arte bizantina*, 1988, Tav. V-2 ; H. Buchwald, *op. cit.*, p. 255-260, fig. 11 ; Z. Mercangoez, « Réflexions sur le décor sculpté byzantine d'Anatolie occidentale », *BCH Suppl.* 49, 2008, fig. 19. | ㉔世梁後半_ㄹ年代推定_ㄹ。
 (32) H. Buchwald, *op. cit.*, p. 256, fig. 8. | ㉔~㉔一世紀_ㄹ年代推定_ㄹ。
 (東京大学総合文化研究科特任研究員)



图2 石材 no. 211



图1 石材 no. 210



图4 石材 no. TB021



图3 石材 no. TB005



图5 石材 no. TB045

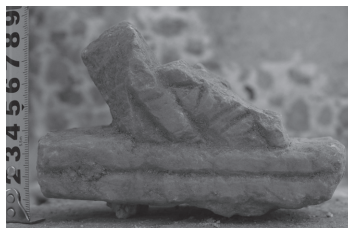


図7 石材 no. 342 (表・裏)



図6 石材 no. 311 (表・裏)



図9 石材 no. 394 (表・裏)



図8 石材 no. 354 (表・裏)



图 10 石材 no. TB007



图 11 石材 no. TB010（表・裏）

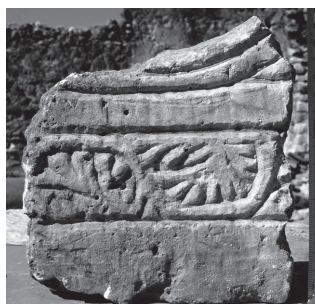


图 12 石材 no. TB026（表・裏）



图 13 石材 no. 407

Excavation Report, Basilica of Tlos 2013-2014: Sculptures

NARASAWA, Yumi

ト
ロ
ス
司
教
座
聖
堂
出
土
の
装
飾
石
材
に
つ
い
て
(
奈
良
澤
)

We listed, photographed and measured 234 stone elements (Nos. 170-404) during the summer excavation season of 2013, and 39 during the season of 2014. We also listed 47 elements from preparatory excavations in 2010-2012 (Nos. TB001-047).

Most of the elements listed in 2014 are marble pavements found in the sanctuary, just above the floor level. They have different thicknesses and forms, due to reusing of marble materials of various sorts.

20 fragments of openwork plate were found from the preparatory excavations in 2010-2012 and 17 fragments during the summer of 2013. Made in local limestone, they present geometrical and vegetal decorations with some reliefs showing palmettes which are schematically represented. I identify these openwork plates as local productions of the 6th century. They must have been from the furniture which clothed the sanctuary.

In 2014, we found a marble relief plate decorated with an interlacing design and rosette motifs (No. 407). This was a type of design widespread in Greece and Anatolia in the Middle Byzantine period.